

わたしを支えた一言・一節

今も忘れえない亡夫の激励

みかこ ともみ  
三門お染

千年の恋。人生は長くても真実の愛に、めぐり合える人は数少ない。三門お染は、その稀有な例だ。

「私は毎日、鉦(こう)ちゃんの写真と話をしているんですよ。江口さんは、いつもわたしの心に生きています」

呼ぶのは、昭和56年に62歳でこの世を去った最愛の夫、江口鉦三郎(えぐち・こうざぶろう)さんだ。結婚生活は33年にわたった。

「江口さんの写真を部屋中に飾って、日々の出来事、楽しいこと、悲しかったことを聞いてもらいます。すると江口さんがいうんです。『がんばれよ。オレが守ってやるからな』って言うているようで。その一言が私を支えているんです」

江口鉦三郎は二代・廣沢虎造の弟子で廣沢龍造として活躍、のちに浪曲作家としても名を成した。

「若いうちは角突き合わせて、とつつかみあいのケンカばかりしていました。江口さんは心根のやさしい人でした。江口さんの昔話をすると三楽会長に『生きてるときに大事にしときゃよ

かったのに』といわれるの。おほほほ」

故人のノロケばなしが好もしく聞けるのも、お染の人柄だろう。

曲ったことが大嫌い、人の道を大切にすることをお染は娘の泉ピン子に時として厳しいアドバイスもする。

「ピン子には鉦ちゃんに成り代わって、『売れなかったときのことを忘れずに、天狗になるな』って言いさしているんですよ。実るほどこうべが垂

れる稲穂かな、だぞって」

お染は今、ガンに冒されている。声帯にできる乳頭ガンでここ数年は毎年、手術をしている。今年も10月に手術をしなければなら

ない。  
「若かったら、怖くて毎日ないているでしょうね。今度、メスを入れたら命に別条は無いが商売用の声は出せませんよ、と医師に宣告されています」

こんな深刻な告白もサラッと話せるお染は気丈で竹を割ったような性格だ。

9月26日(日)に浅草公会堂で行なわれる浪曲大会が芸の締めくくりになるかもしれない。当日は東家三楽・日本浪曲協会会長が「女の花道を飾らせてやる」と、三楽会長との掛け合いで「赤垣源蔵 徳利の別れ」を口演する。



右は平成2年に51歳で急逝した二代目・篠田実。「明るくて、ひとなつこくて、これからっていうときに逝くなんて。本当に残念です」

お染の十八番は「残菊物語」だ。主人公の、お徳の描き方が絶品で、舞台の先代・水谷八重子にも匹敵すると激賞されたこともある作品だ。

「お徳が、見舞いにきた菊之助に『私にかまわないで行ってください』と懇願します。自分と一緒にいるために勧められた若旦那の菊之助が出世して見

舞いにきてくれるところ  
です。この部分を語るときは鉦ちゃんを思い出して胸が詰まって泣けてくるんですよ」

と最後までご亭主の話に  
終始した取材だった。  
手術を成功させてもう  
一度、「残菊物語」をぜひ  
とも披露してもらいたい  
ものだ。(おとだ)



江戸前のサバサバした品のある語り口。きつぷがいい姉御肌。舞台上の時は必ず「鉦ちゃん」の写真を懐ろにする。



昭和27年、結婚三年目でお染師は27歳。廣沢龍造師と。「鉦ちゃんは声は細いが芸達者でした。ハンサムでしたよ。ウフフ」